

二〇二二年八月二七日

ひき潮のたびに鳴く砂鳥帰る
恐竜の吐くミスト浴ぶ残暑かな

みきお
なつき

二〇二二年八月二六日

鉄塔に引つかかりたる秋の雲
無花果を植えた亡き子に供へけり
新涼や厨にパンを焼く匂ひ
一畝はオクラの花の舞踏会

たか子
董雨
やよい
あひる

秋思憑く言わずもがなのひとことに

明日香

爽やかや手離しにこぐ一輪車

満天

二〇二二年八月二五日

あかとんぼ辻立ち僧の鉄鉢に
見落として茗荷の花を咲かせけり
爽やかやパラアスリート皆笑顔
涼風の六甲に飲むミルクかな

凡士
凡士
満天
凡士

山里の句碑は右城や桐一葉

素秀

二〇二二年八月二四日

軽トラに揺られ畦ゆく案山子かな
秋暑しペティキュアの彩褪せにけり
田の神へ祈る豊作稲の花
夾竹桃続く川土手爆心地
岬鼻に深呼吸せる金風裡
秋雲を貫くブルーインパルス

智恵子
もとこ
みきお
みきお
素秀
智恵子

コロナ禍の事告げながら墓洗ふ

董雨

二〇二二年八月二三日

路地裏に線香煙る地藏盆
切通し仰ぐ天蓋薄紅葉
ささやけるごとウエーヴす秋桜
ひまわりの地に着きさうなお辞儀かな
須磨寺の句碑を巡れば処暑の風
山羊親子鈴鳴らしゆく花野かな
雲の瘤まだ隆々の残暑かな

宏虎
智恵子
明日香
やよい
凡士
素秀
凡士

二〇二二年八月二二日

新秋の岬を洗ふ波しぶき
天空のリフト足下に大花野
むかご飯郷閑出でて幾星霜
塩蜻蛉蓮の広葉をジプシーす

素秀
智恵子
よう子
はく子

二〇二二年八月二一日

蛸の声ではじまる山の朝
眼福や車窓に秋の日本海
白龍のごと霧のぼる生駒の嶺
葉茶に氷うかべて暑に耐ふる
堂縁に紫煙漂ふ夜学かな
兄いもと打ち水足に掛け合ふて
翻りたる緋は鯉や秋徼雨
村祭り肩車され踊りの輪

みきお
むべ
あひる
なつき
素秀
なつき
やよい
智恵子

毎日句会みのる選・二〇二二年八月二九日